NICUにおける母子相互作用を中心とした感染予防対策

II. 入室家族の上気道からの細菌およびインフルエンザウイルスの検出

（分担研究：　新生児の感染症に関する研究）

中　嶋　健　之*
白　井　徳　満，　山　南　貞　夫，　奥　　起久子
田　村　健　一，　梶　原　道　子

要　　約

昭和62年1年間に，東京都立豊島病院未熟児室（NICUを含む）に在室した小児の家族237家族中211家族（89％）が1回以上入室面会した。1年間ののべ入室回数は1610回であり，健康状態アンケートに症状，疾患が記載された回数は，約5％であった。

インフルエンザの流行した冬期に，入室家族および未熟児室内で面会を受けた小児の咽頭から細菌およびインフルエンザウイルスの検出では，家族と小児の咽頭細菌叢は一致せず，また，感冒症状の有無にかかわらず，インフルエンザウイルスの検出されたものはなかった。

見出し語：　健康状態アンケート，家族入室面会，咽頭細菌・ウイルス

研　究　方　法

1. 健康状態アンケートによる家族入室面会の実態調査

東京都立豊島病院未熟児室（NICUを含む）では，昭和61年12月10日から，家族が入室して小児に面会する際に，書面で家族の健康状態をチェックしている。[1)]

この健康状態アンケートにより，昭和62年1月1日から12月31日までの1年間における家族入室面会の実態を調査した。

2. 入室家族および未熟児室内で面会を受けた小児の咽頭からの細菌およびウイルスの検出

対象は，インフルエンザの流行した昭和62年1月に，東京都立豊島病院未熟児室に在室した小児およびその家族の14組とした。

このうち，鼻漏，咳嗽，咽頭痛などの感冒症状があるとアンケートに記載した家族は5名であった。小児で感冒症状を呈したものはなかった。

方法は，家族は入室直前に，その小児は面会2～3日後に，咽頭粘液をカルチュレット®および滅菌綿棒で採取し，カルチュレット®は所定の操作後，細菌培養を，滅菌綿棒はハンクス液内ですすいで，咽頭ぬぐい液を液内に移し，ただちに凍結，輸送し，その日のうちに，MDCK細胞と発育鶏卵を用いて分離培養を開始した。

* 東京都立豊島病院小児科
(Dept. of Pediatrics, Tokyo Metropolitan Toshima Hospital)

結　　果

1. 家族入室面会の実態調査

1）在室した小児の237家族中211家族（89%）が1回以上入室面会した。

2）入室面会のべ回数は，入室面会を希望した回数が1616回で，症状著明なために入室を断った回数が6回あり，実際に入室した回数は1610回であった。このうち，マスク，ゴム手袋などの感染予防措置を行った後に入室したのが43回あった。

3）日曜，祭日を除き，1日平均5人が入室した。

4）入室希望家族により，健康状態アンケートに症状，疾患が記載された回数は1616回のうち87回（5.4%）であり，冬期に多かった（図1）。

記載された症状，疾患ののべ数は109で，鼻漏，咳嗽，咽頭痛など感冒症状が多かった（図2）。

2. 入室家族および小児の咽頭からの細菌およびウイルスの検出

咽頭から検出された細菌は，家族では正常細菌叢がほとんどで，小児では，緑膿菌，グラム陰性ブドウ球菌，citrobacter，serratia などが多く，家族とその小児で一致しなかった。

また，家族の感冒症状の有無にかかわらず，家族および小児の咽頭から，インフルエンザウイルスの検出されたものはなかった。

考　　察

1. 家族入室面会の実態調査

約90%の家族が入室面会し，入室ののべ回数は，症状著明で入室を断った6回を除いて，1年間で1610回の多きに達した。

入室したなかにも，マスク，ゴム手袋などの感染予防措置を必要としたものが43回あり，症状軽微なものを含めると，症状，疾患が記載された回数は87回（約5%）あった。

書面による健康状態アンケートは，症状，疾患のある家族をチェックし，対策をこうずるうえに，ある程度の効果を有するとともに，感染防止に対する家族の意識をたかめ，症状や疾患が軽くない場合には，自分から入室面会を辞退するようになる効果もみられた。

さらに，入室面会の実態を書面に記録しておくことは，室内に感染症の流行が起こった際に，その原因調査の資料にもなる。

従って，家族入室時の書面による健康状態アンケートは，家族入室による院内感染予防の決定的な有効手段ではないにしても，一助になると考えられた。

2. 家族および小児の咽頭からの細菌およびウイルスの検出

咽頭細菌叢は，家族とその小児で一致しなかった。これは，小児の咽頭への細菌colonizationは，面会のため短時間入室し小児と接触した家族の咽頭細菌叢からよりも，室内のbasic floraから起こるとした，著者らの昭和59年度厚生省心身障害研究の報告[2]と同様の結果であった。

また，家族の感冒症状の有無にかかわらず，家族および小児の咽頭からインフルエンザウイルスの検出されたものはなかったが，これは，ウイルス検出の技術的問題なのか，あるいは，無症状者はもちろん，症状が軽微な場合にはインフルエンザウイルスが検出されることが稀なのかは，不明であった。

文　　献

1）中嶋健之，白井徳光，山南貞夫，奥起久子，田村健一ら：NICUにおける母子相互作用を中心とした感染予防対策，厚生省心身障害研究新生児管理班，新生児管理における諸問題の総合的研究 昭和61年度研究報告書，289頁.

2）中嶋健之，白井徳満，山南貞夫　奥起久子，村山恵子：NICUにおける家族面会と感染防止対策，第1報；アンケートによる実態調査，厚生省心身障害研究新生児管理班，新生児管理における諸問題の総合的研究 昭和58年度報告書，243頁.

昭和62年度月別入室面会希望回数(計1616回)

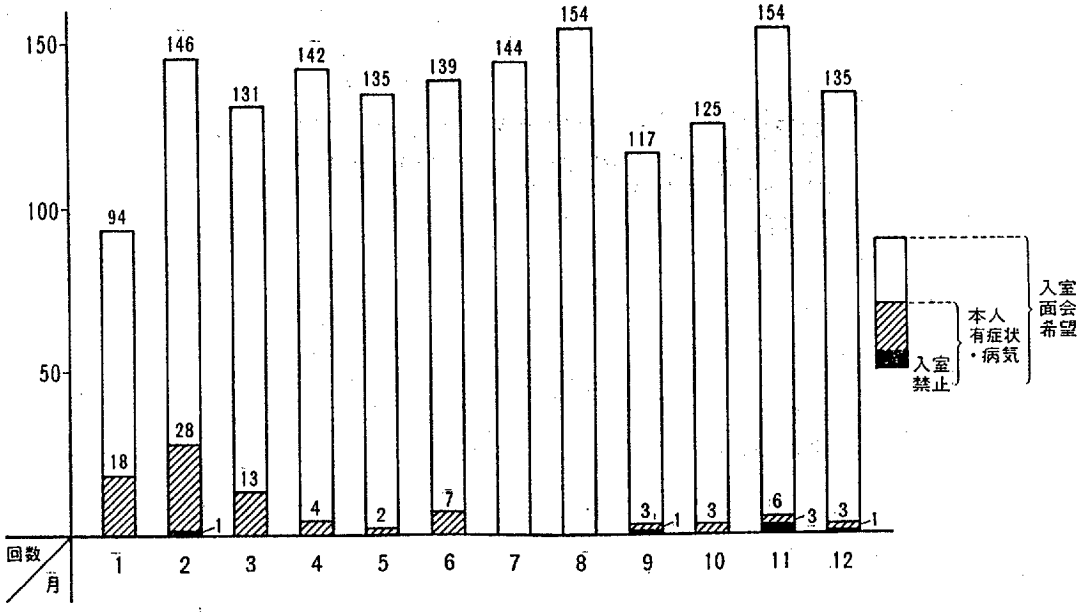

図1.

健康状態アンケートに記載された症状・病気ののべ数
（昭和62年１月１日～12月31日）

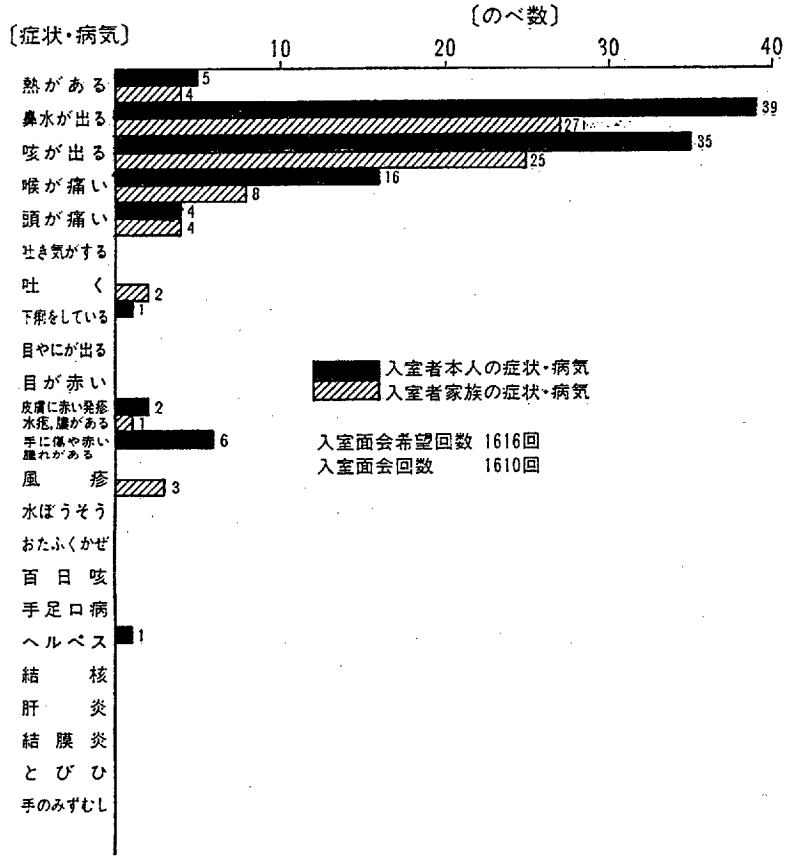

図2.

検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用
論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります

要約

昭和62年1年間に,東京都立豊島病院未熟児室(NICUを含む)に在室した小児の家族237家族中211家族(89%)が1回以上入室面会した。1年間ののべ入室回数は1610回であり,健康状態アンケート.に症状,疾患が記載された回数は,約5%であった。

インフルエンザの流行した冬期に,入室家族および未熟児室内で面会を受けた小児の咽頭から細菌およびインフルエンザウイルスの検出では,家族と小児の咽頭細菌叢は一致せず,また,感冒症状の有無にかかわらず,・インフルエンザウイルスの検出されたものはなかった。